

一般校からの就労相談に TTAP・BWAP2 を活用したケース ～アセスメントを通じての、家庭・関係機関との連携～

○酒井 健一（社会福祉法人釧路のぞみ協会 自立センター 職業準備・職場定着支援係長）
くしろ・ねむろ障がい者就業・生活支援センターふれん スタッフ一同

1 はじめに

社会福祉法人 釧路のぞみ協会 自立センター（以下「自立センター」という。）では、くしろ・ねむろ障がい者就業・生活支援センターふれん（以下「ふれん」という。）を受託して運営している。ふれんでは、職業的自立を果たすことを目的として、評価・アセスメントを実施し、対象者に応じたプログラムの作成・支援、そして、地域の関係機関と連携しサポートを行っている。今回、幼少時に手帳を取得したが、通常教育を受け続けた対象者について、TTAP・BWAP2 のアセスメントを実施し、その結果を家庭・学校、医療と共有する事により、進路選択の一助とした事例について発表する。

2 本人の概要

T 氏～17 歳の男性。幼少期から発達の遅れがみられ 5 歳の時に広汎性発達障害の診断を受け療育手帳を取得。家族が小中学校は、対象者がのびのび学び通学できることを願い遠方の少人数の学校に入学させた。大きな問題なく学校を卒業し、その後、普通高校に進学するもこれまでと環境が大きく変化した事や、特性から、周囲とのコミュニケーションが上手く取れない、学業不振などの問題が顕著となった。高校 2 年生時の進路を具体的に検討する時期にも、漠然と就職したい希望はあるものの対象者は、自ら目標を持つことが難しく、担任からふれんに問い合わせがあり、相談開始となった。

3 本人・家族・学校との面談を通じての課題の整理

対象者の状況を把握するため、母親同席の元、対象者と面談を実施している。母親からは、自ら意志を伝えることが苦手、また、家庭での日常生活においては、多くの部分で母親が援助を行っていることなどの課題が確認された。対象者に対する質問に対しても簡単な「はい」「いいえ」でこたえられる以外の返答ができず、返答に困った際には母親の顔をみて助けを求め、母親が返答していた。また、担任への聴取では、家庭ではできないとされていることも出来ている事もあったため、環境によるスキルの変化を明らかにすることを目的として、TTAP・BWAP2 のアセスメントを実施してハードスキル・ソフトスキルの整理を行う事とした。

4 BWAP2 の実施

在学時に BWAP2 を実施して「就労の課題」を整理し支援のニーズを整理することとした。BWAP2 では、「仕事の

習慣・態度」「対人関係」「認知スキル」「職務遂行能力」の 4 領域のスキルアセスメントが可能となる。また、「援助要求スキル」等が多く含まれている。アセスメント結果は、相対的に解釈できる T スコアの結果は職業習慣 (HA) 41 点 (以下「HA」という。) 対人関係 (IR) 39 点 (以下「IR」という。) 認知能力 (CO) 46 点 (以下「CO」という。) 仕事の遂行能力 (WP) 32 点 (以下「WP」という。) 職業能力レベル (BWA) 37 点 (以下「BWA」という。) WP では生活介護レベル、全体では福祉就労(低)レベルとしての結果が見られた (図 1)。

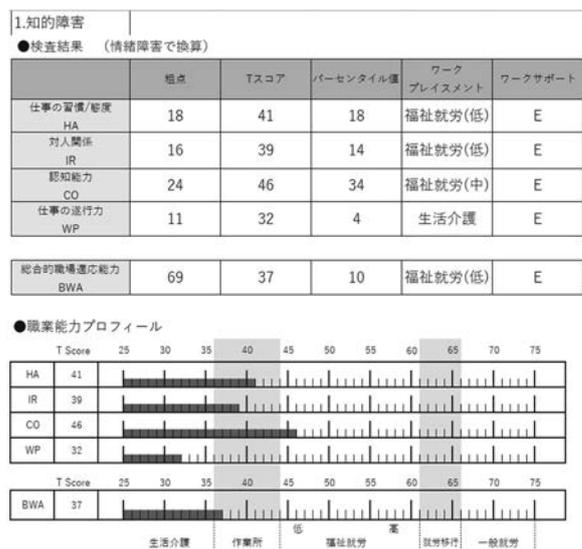


図 1 BWAP2 の評価結果 在学時

5 TTAP の実施

BWAP2 の結果 (図 1) を基に、学校、家庭において就労に向けた取り組み内容を具体化するために知的障害を伴う自閉症を対象とした TTAP によるアセスメントを実施した (図 2)。の検査道具を使い実際に検査を行う直接観察尺度ではハードスキルの面では合格 (以下「P」という。) が多く見られている。ソフトスキルの面では周囲の状況を見て行動するという項目等に芽生え (以下「E」という。) が見られている。家庭尺度では母親に半構造化面接によるアセスメントを行った。ハードスキル・ソフトスキル共に E が多く見られている。例として職業スキルの項目では、「一人で衣服を洗濯して乾かす」の項目や「食器を洗って乾燥させる」というような、直接観察尺度で P となった項目についても E がついている。これらは、日常生活場面におい

て母親の介入度が高く対象者が自ら行動する機会が少ない環境であることを示していると考えられる。特に自立機能の項目で顕著に現れた。学校尺度では、担任に半構造化面接を行った。学校尺度でも家庭尺度同様に、多くの項目で、Eの検査結果となっていることが分かった。特に「時計の時間が分かる」のような、集団生活において、他人に依存することができる項目で芽生えが見られている。また余暇スキルについては「集団行動に参加する」等を含めた、他者とのコミュニケーションが必要な事についてはEの検査結果となっている。3尺度、6領域のアセスメントからTTAPの結果として分かった事は、対象者が獲得しているスキルは多いが、環境の違いにより活動状況に差異がある事が分かった。

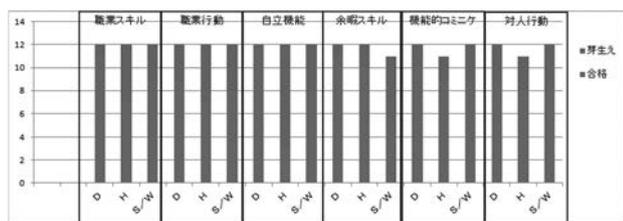


図2 TTAPのスキルプロフィール

6 アセスメントの結果から

BWAP2 (図1)、TTAP (図2) の結果から、基本的なスキルとして身につけている事は多く見られてはいるが、今までの学校生活や家庭環境から汎化出来ていない事がEの検査結果となっている事が分かった。アセスメントの結果を計画につなげるための分析フォームでは指導目標設定を行った。BWAP2の4領域HA・IR・CO・WPの項目も反映することにした。職業スキルでは作業を行う際には絵やマニュアルの提示等で習熟を促す。職業行動では業務を行う際には具体的な数量を設定し自ら確認すること。構造化することで整理・物の管理を行うこと。自立機能では自身でスケジュールや手順書を確認して行動すること。身だしなみを整えること。余暇スキルでは、オンとオフの切り替えが出来ること。機能的コミュニケーションでは、日誌等を用いて自らの行動を振り返りニーズを相手に伝えること。対人スキルでは、最低限の場面に沿った行動や振る舞いが出来ること。これらの事を目標として計画を立案している。

7 家庭・学校・医療との共有

対象者のストレングス・課題についてアセスメント結果を基に対象者・学校・家庭と面談を実施している。対象者が服薬をしていることから医療との情報共有も行った。獲得しているスキルについては、就労の場面でも活かせるような環境を確認・構築する必要も示唆した。Eのスキル項目に関しては、家庭、学校と連携して取り組むことで獲得が可能となる事を伝え実施となった。また、今後の進路としては①職業準備性を高める必要があること②継続したスキル向上が期待できることを伝えた。その後、学校の進路

面談でも検討を重ね、その結果、対象者・家族共に卒業後は、就労移行支援事業所の利用を希望された。

8 就労移行支援の活用

就労移行支援事業の利用直後スキル向上に向けた取り組みを確認するためBWAP2を実施した(図3)。

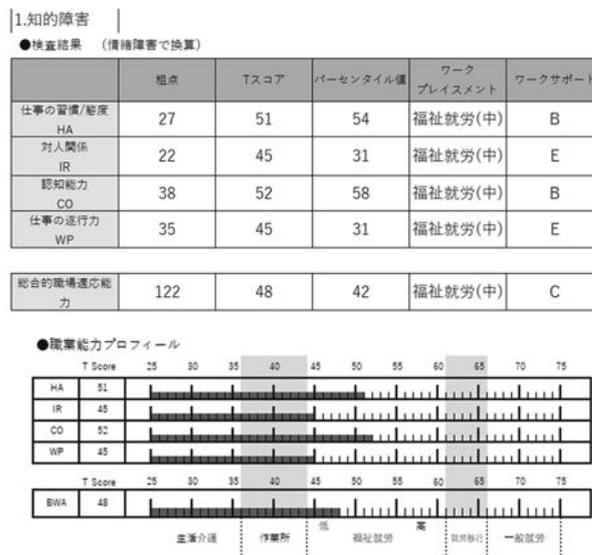


図3 BWAP2の評価結果 就労移行利用時

家庭・学校が協力して取り組むことで各項目もスキル向上が確認されBWAは生活介護から福祉就労と向上した。今後の就労移行支援事業での活動に期待ができる結果となった。

9 まとめ

近年、就労相談の対象が多様化している。今回のような通常教育を受けている方達からの相談も増加しており、この傾向は継続すると考えられる。今回、実施したBWAP2は行動観察を中心とするアセスメントであることから高い専門性を必要とせず実施可能である。TTAPのアセスメントは詳細にスキルの整理が可能でEからPまで導くことができ、より具体的な就労への道筋が見出せるものであった。また、対象者のみならず、家庭・関係機関との共有を図り易いツールである。両アセスメントの結果からは、今後、どのような具体的な取り組みが有効なのかも確認できた。継続したアセスメント、それに基づく連続した支援が可能となり、本人の自己理解も進む結果となった。

【参考文献】

- 1) 梅永雄二『TTAP—自閉症スペクトラムの移行アセスメントプロフィールTTAPの実際』
- 2) 梅永雄二『発達障害の人の就労アセスメントツール』

【連絡先】

酒井 健一
社会福祉法人 釧路のぞみ協会 自立センター
e-mail : jiritsu-center@sky.plala.or.jp